

奨励

互いに重荷を担いなさい

奨励	垣内 純子 [かきうち・じゅんこ]
奨励者紹介	六甲中学校・高等学校宗教科非常勤講師 平安女学院中学校・高等学校聖書科非常勤講師

互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。

(ガラテヤの信徒への手紙 6章2節)

六甲学院

私は、現在は週の前半を京都の御所の向かい側にある平安女学院という聖公会の中高で、週の後半は神戸の六甲学院というカトリックの男子中高で宗教を教えています。今日、お話ししたいのは六甲学院の方です。この学校はイエズス会によって創立されました。六甲学院は別名ザビエルの学校です。日本にキリスト教を伝えた、あのフランシスコ・ザビエルです。今日、12月3日はザビエルの祝日(亡くなった日)で、六甲学院の創立記念日で休校です。こちらに来ることができました。「イエズス」とは、かつてカトリックはイエスをイエズスと呼んでいたのです。ですから、今で言えば「イエス」会です。16世紀にパリで設立された男子修道会です。現在のローマ教皇フランシスコはこのイエズス会出身の初の教皇です。

イエズス会系の学校のモットーは“Man for Others, with Others”「他者のために、他者と共に」です。すなわち、仕える人になるということです。そのために勉強し、声にできない人の声を代弁し、社会を変える人を育てる教育を行うということです。それは問題を抱えている人の問題を肩代わりするというではありません。相手の問題を自分自身の問題として考えることです。他者と共にある、すなわち他者との関係を頭ではなく、生活のなかで築いていく信頼関係です。

学校は、私から見たら十分山の上ですが、学校の説明では「六甲山の中腹」に位置し、風光明媚ではありますが、最寄駅の阪急六甲駅から徒歩25分坂登りです。当然生徒は週6日、この坂を上り下りします。途中からの坂の傾斜が結構きつい上、最後に120段の階段を上るとようやく校庭です。校舎へはまだ20段階段があります。私は週3日ですが、生徒と一緒に坂を上っています。先日、教え子の高3生が「先生、よく頑張っているねえ」と褒めてくれました。

この学校の特徴は、いろいろあります。体育祭では、中1から高3全員が、上半身裸で約40分間、「総行進」と呼ばれるマスケゲームを行います。生徒たちでプログラムを作り、高3が中心になって、後輩を指導します。体育祭の華です。テレビでも何度か放映されたので見た方もあるかもしれません。また「便番」と呼ばれるトイレ掃除が有名で、冬でも短パン1枚になって、素手で便器を掃除します。半日で31キロを走る強歩大会も毎年ありますし、基本的に毎日2時間目の授業終了後、10分間全員これまで上半身裸で校庭を走ります。中間体操と言います。私は男子中学生を教えるのは、今年度が初めてなのですが、授業中、そわそわと落ち着かない生徒に理由を尋ねると、「雨で中間体操が中止になったので、ストレスが溜まった」と言ったときは、感激さえしました。そんなわけで裸になるのが好きな学校です。女子校育ちで娘しか育てたことのない私には、びっくりすることだらけです。

ふれあいコミュニケーション

しかし、残念ながら現代っ子は「裸の付き合い」が下手なようです。特に高1は他者への関心が希薄な感じがします。これだけ裸でぶつかっているはずなのに、他者が見えていない。同じクラスメイトでさえ、接点をもととしない感じがありました。それで先日、2学期最後の授業で、思い切った取り組みをしてみました。名づけて「ふれあいコミュニケーション」。アトランダムに席を決め、隣になった人とまずは握手。そのまま腕相撲になるのはさすが男子校。続いて、相手の手の甲を優しくなでたり、両手で挟んで相手の温もりを感じてみる。今度は立ち上がってまずは各自で前屈。どこまで手が届くかをチェックし、次に、隣の人の肩に片方の手を置いたまま、前屈。最後は再び一人で前屈。不思議なのですが、肩を貸してもらったときの方がよく曲がり、2回目の一人での前屈もうまくいきます。皆さんもやってみてください。そして最後に相手と背中をくっつけたまま、座る、立ち上がる。こんなことをしてみました。

たまたま仲の良い子が隣になった組は最初から盛り上がりませんが、そうでない組は恥ずかしがってなかなかやりません。でも周りの歓声や笑い声につられて仕方なくやってみると、その後はもう生徒に任せて楽しんでもらいました。まずは自分の身体の温もりを感じる。意外と自分の身体の温かさを普段感じないで生活しているものです。そして相手の身体の温もりを感じる。相手も生きていることを触って実感する。それから一緒に何かをやってみる。

実は最後の背中合わせでの座る、立ち上がるは、相手に身体を預けた方がうまくいきます。お互いが自分の身体を相手に委ねるのです。相手の温もりを感じながら、自分一人で生きているわけではない、孤独ではないことを確認し、頼りかかって支えてくれると信じる、つまり相手への信頼があるとうまくいくのです。

これを私の説明ではなく、生徒自身がやっているなかで自らが気づいてほしいと思いました。結果的に多くの生徒がそれに気がつき、身を任せることへの「心地よさ」さえ感じていました。

これは共学ではなく、男子校だからこそできることだったと思います。「男同士で気持ち悪い」と言っていました。

顧みて、私たちの日々の生活で、他の方と触れ合う機会はあるでしょうか。電車通勤をしていて、ロングシートに座る人と人との空間が空いてきている感じがします。スマホを見たりメールをするのに肘を張る人も増えています。また、まるでガードのように荷物を座席に置いたり、ヘッドフォンをして、さまざまな方法で他者とは触れない努力をしているような気がします。逆に、以前は体が触れた場合、自然と「すみません」という言葉が出ていましたが、現代はまず聞きません。

ご家庭でも家族と身体の触れ合いがありますか。そう言う私自身、子どもが大きくなるとなかなかチャンスがありません。娘が小学生のとき、親に抱っこしてもらって「抱っここの宿題」を出す担任の先生がおられました。宿題にでもしないと親も子どもも恥ずかしがって抱っこしなくなることをよくご存じの先生でした。

大人が他者との接触を拒む時代、ましてや若い人は尚更でしょう。触れ合う機会はなかなかありません。

マリアの賛歌

先ほど一緒に賛美した讃美歌95番は、ルカによる福音書1章46節以下に記された「マリアの賛歌」として大変有名な詩によるものです。イエスの母マリアの信じる神は、ユダヤ人をエジプトから、奴隷状態から救い上げてくれた神です。ユダヤ人はその出エジプトの救いの出来事を、現代でも毎年「過ぎ越しの祭り」としてお祝いします。普段は信仰とは無縁の人もこの祭りだけはお祝いすると言われています。あたかもあのとき、自分がエジプトにいたかのように追体験するお祭りです。頭ではなく、身体で知るので。神の救いを実感するわけです。その思いを毎年味わい、強めていくのがユダヤ人の信仰です。マリアも同様だったことでしょう。神は社会正義を実現する方です。マリアが生きていた時代、ユダヤはローマ帝国に支配されていました。けれども神は、きっとまた再びユダヤの民を救ってくれると信じているマリアです。このマリアの信じる世界を実現させようとしたのは、まさにマリアの子、イエスでした。

2000年前のユダヤでは婚約後、1年程度の期間を置いて結婚します。この間、婚約者が二人きりで会うようなことはできません。結婚前に妊娠が分かれば、女性は石打ちの刑で死刑でした。女性は男性の財産の一部。その男性の血を引かない子どもを妊娠した女性は、おなかの子どもと共に命を絶たれます。私たちは受胎告知のシーンをまるでおとぎ話のように美しい話として聞きますが、当のマリアにとって、婚約中の妊娠は決して心から喜べることではありませんでした。それでもイエスを産む決心をしたのは、まさに神への信頼です。幸い婚約者のヨセフは、自分が他の人びとから笑い者になることを承知でマリアを妻として迎えます。それはヨセフも神を信じる人であり、マリアを信じるからこそできたことでしょう。マリアと赤ん坊の命の温もりを感じることでできるヨセフだったのです。

クリスマスの出来事

クリスマス・ページェントなどでは、住民登録のため、ヨセフは故郷のベツレヘムへ身重のマリアを連れて旅します。マリアは泊まる場所がなかったので、馬小屋で出産した、とされます。聖書には生まれたイエスを飼葉桶に寝かせた、とあるのですが、これは変な話です。親族を大切にユダヤ人、ましてや身重で出産を控えている女性を拒否するはずがありません。私たちでも、もし目の前に産気づいた女性がうずくまっていたら、何かできることはないかと声を掛けるのは当然のことでしょう。でも、もしマリアの出産の話が事実であったなら、この夫婦は拒否されたのです。すなわち、ヨセフの子ではないということをヨセフの親戚は知っていたのでしょう。馬小屋とはすなわち、人間扱いされない状態で出産したということです。誰も助けてくれず、二人だけでの出産ということです。そしてマリアと幼子イエスの元にやって来るのは、当時のユダヤ人たちから差別された羊飼いたちでした。東方から来たと言われる博士たちもユダヤ人の嫌う外国人でした。神を信じて従うヨセフとマリアの側に立つ人びとは、ユダヤ人から人間扱いされなかった人たちばかりです。彼らは自分が苦しんでいるからこそ、同じ苦しみにある人を理解することができたのでしょう。

クリスマスの話が温かく感じられるのは、この人たちの交流が温かいからではないでしょうか。

支え合うこと

アドベントに入りました。私たちはイエスを待ち望みます。神の子イエスでさえ、初めは全てを人の手で世話してもらわないと生きていけない赤ん坊として、この世にいられます。赤ちゃんのお世話話、実際大変です。待たなし、手を煩わされる、面倒な存在です。そんな赤ん坊のイエスは、私たちに問いかけられます。あなたに全信頼を寄せてもいいですか、と。クリスマスを楽しみにしている私たちですが、イエスの信頼に応える覚悟がありますか。イメージしてください。きれいごとではありません。時も場所も考えない、自分の思いのままに泣き、排せつし、ぐずる手間のかかる赤ん坊です。そのお世話に自分の時間も取られ、時には寝る間もないほどです。でもイエスは私たちの腕の中ですっぽり入る、小さいけど温かい存在なのです。そしてこの温かさを知ることによって、私たちはイエスの存在を感じ、受け入れ、信じることができるのです。

一寸先は闇の人生です。縁あって同じ時に生を受けた私たちも互いの存在を確認しましょう。互いの重荷は、単に重たい耐え難い苦勞です。でも互いの温もりを感じて支え合うなら、その荷も耐えることができるでしょう。信頼し合って、一步一步、共に歩んでいきましょう。その重荷はイエスご自身も一緒に背負ってくださいます。マタイによる福音書11章28節から30節で、イエスはこう言われています。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。

いつかきっとその重荷も生きることへの希望や喜びに変わる日がくることでしょう。

どうぞよいクリスマスをお迎えください。

2014年12月3日 京田辺水曜チャペル・アワー「アドベント讃美礼拝奨励」記録